

資料

思春期の性教育ニーズの検討(2) — 避妊教育と教育の場 —

忠津佐和代*¹ 藤原 望*² 長瀬尚子*³

緒 言

近年わが国でも性行動の低年齢化が加速化し、10代の妊娠や人工妊娠中絶、性感染症の罹患率の増加により若者の健康が脅かされている^{1,2)}。思春期の性の健康問題が増加する背景には若者の意識や性行動の変化が大きく影響していると考えられる。また、従来の若者の性教育は、この若者の意識や行動に対応しておらず、若者の性の健康を維持・促進する効果的なものになっていなかったのではないかと懸念される。そこで、本研究では思春期の性教育ニーズを把握する基礎資料とするため、高校終了後の大学1年生の性に関する意識・知識・行動などを調査し、性教育ニーズの中の避妊教育と教育の場について検討し、若干の知見を得たので報告する。

方 法

調査期間：平成13年7月1日～17日

調査方法：第5回青少年の性行動全国調査報告(1999)¹⁾を参考に作成した質問紙を用いて集合法により自記式質問紙調査を実施した。倫理的配慮として、県某大学1年生のうち、調査期間内に調査依頼説明の承諾の得られた科目担当者の授業前に口頭と文書で授業後の調査依頼をし、承諾の得られた学生に授業後無記名で座席間隔をあけて調査を実施した。また、質問紙の回答は自由であること、統計的に処理するため個人情報公開されないこと、研究以外に使用しないことなどを書面と口頭で説明した。回収方法は回答面を内側に四つ折にして回収箱に回収した。

調査対象者：283名(男性；132名、女性；151名)
データの回収率94.0%(266/283件中)、
有効回答率96.6%(257/266件中)
分析対象者：257名(男性；115名、女性；142名)

調査内容：性について知りたいこと、性に関する悩みの有無と相談相手、性意識・行動への影響因子、セックス(性交渉)経験に関すること、性感染症予防および避妊の実行とその理由、学校での性教育とその効果、学校以外での避妊教育の機会の有無など。

分析方法：本論文では、性について知りたいこと、性に関する悩みの有無と相談相手、性意識・行動への影響因子、セックス(性交渉)経験に関することなどの調査内容を単純集計した後、男女別に χ^2 の有意差検定を行った。但し、周辺度数が10以下のものについてはフィッシャーの直接確立法を用いた。

結 果

1. 属性

分析対象者は257名で、平均年齢は18.7±1.12歳であり、うち男性が44.7%(115名)、女性が55.3%(142名)を占めていた。

2. 避妊について(表1～表5)

(1) 避妊の実行については表1に示すとおりで、3選択肢のうち「いつもする(67.%)」者が最も多く、「いつものしない(4.1%)」者は1割以下と少なかった。一方、男女の比較では、「いつもする」は女性に多く($p<0.01$)、「場合による」は男性に多く($p<0.01$)ともに有意差が認められた。

(2) 「いつもする」と回答した163名の避妊方法(複数回答)は表2に示すとおりで、「コンドーム(92.6%)」が最も多く、「月経からの日数を数える(10.5%)」、「膣外射精法(9.3%)」と続いていた。一方、男女の比較で有意差が認められたのは、「月経からの日数を数える」($p<0.001$)・「基礎体温を測る」($p<0.05$)で、ともに女性しかできないもの

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科 *2 松山市立波和地小学校 *3 東京女子医科大学病院
(連絡先) 忠津佐和代 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: tadatsu@mw.kawasaki-m.ac.jp

- であった。
- (3) 「いつもする(163名)」と回答した者の避妊の理由(複数回答)は表3に示すとおりで、「子どもを育てられない(72.0%)」が最も多く、「当たり前のこと(41.0%)」、「病気の感染防止(36.6%)」と続いていた。一方、男女の比較では、「相手の体を思いやって」($p<0.001$)は男性に多く、「病気の感染防止」($p<0.01$)は女性に多くとも有意差が認められた。
- (4) 「いつもする(163名)」と回答した者のうち、避妊行動におけるイニシアチブをとる者は表4に示すとおりで、3選択肢のうち「どちらとも言えない(47.3%)」が最も多かった。

一方、男女の比較では、「自分」($p<0.001$)は男性に多く、「相手」($p<0.05$)と「どちらとも言えない」($p<0.05$)は女性に多くとも有意差が認められた。

- (5) 「いつもしない・場合による」と回答した80名の避妊をしない理由は表5に示すとおりで、「準備していない(30.8%)」、「たぶん妊娠しない(30.8%)」がともに最も多く、「めんどくさい(21.5%)」、「避妊を言い出せない(15.4%)」と続いていた。一方、男女の比較では、「めんどくさい」($p<0.05$)と「準備していない」($p<0.01$)は男性に多く、「避妊を言い出せない」($p<0.01$)は女性に多くとも有意差が認められた。

表1 避妊の実行

項目	全体		男性		女性		検定
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	
いつもする	163	(67.1)	63	(57.8)	100	(74.6)	**
いつもしない	10	(4.1)	5	(4.6)	5	(3.7)	
場合による	70	(28.8)	41	(37.6)	29	(21.6)	**
合計	243	(100.0)	109	(100.0)	134	(100.0)	

(注)無回答を除く ** : $p<0.01$

表2 避妊方法

項目	(複数回答)			検定
	全体 N=162	男性 N=63	女性 N=99	
	数 (%)	数 (%)	数 (%)	
コンドーム	150 (92.6)	60 (95.2)	90 (90.9)	
ピル	7 (4.3)	2 (3.2)	5 (5.1)	
フィルム状避妊薬	4 (2.5)	0 (0.0)	4 (4.0)	
月経からの日数を数える	17 (10.5)	0 (0.0)	17 (17.2)	***
基礎体温を測る	7 (4.3)	0 (0.0)	7 (7.1)	*
膣外射精法	15 (9.3)	4 (6.3)	11 (11.1)	
その他	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
分からない	8 (4.9)	2 (3.2)	6 (6.1)	

(注)無回答を除く * : $p<0.05$, *** : $p<0.001$

表3 避妊の理由

項目	(複数回答)			検定
	全体 N=161	男性 N=62	女性 N=99	
	数 (%)	数 (%)	数 (%)	
子どもを育てられない	116 (72.0)	43 (69.4)	73 (73.7)	
後で困る	42 (26.1)	15 (24.2)	27 (27.3)	
当たり前のこと	66 (41.0)	22 (35.5)	44 (44.4)	
相手の体を思いやって	44 (27.3)	31 (50.0)	13 (13.1)	***
病気の感染防止	59 (36.6)	15 (24.2)	44 (44.4)	**
その他	2 (1.2)	1 (1.6)	1 (1.0)	

(注)無回答を除く ** : $p<0.01$, *** : $p<0.001$

表4 避妊行動におけるイニシアチブ

項目	全体		男性		女性		検定
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	
自分	62	(42.5)	33	(62.3)	29	(31.2)	***
相手	15	(10.3)	1	(1.9)	14	(15.1)	*
どちらとも言えない	69	(47.3)	19	(35.8)	50	(53.8)	*
合計	146	(100.0)	53	(100.0)	93	(100.0)	

(注)無回答を除く *: $p<0.05$, ***: $p<0.001$

表5 避妊を実行しない理由

項目	(複数回答)			検定			
	全体 N=65	男性 N=36	女性 N=29				
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	
めんどくさい	14	(21.5)	12	(33.3)	2	(6.9)	*
準備していない	20	(30.8)	16	(44.4)	4	(13.8)	**
たぶん妊娠しない	20	(30.8)	11	(30.6)	9	(31.0)	
避妊を言い出せない	10	(15.4)	1	(2.8)	9	(31.0)	**
相手に断られる	2	(3.1)	0	(0.0)	2	(6.9)	
避妊法を知らない	3	(4.6)	1	(2.8)	2	(6.9)	
その他	13	(20.0)	8	(22.2)	5	(17.2)	

(注)無回答を除く *: $p<0.05$, **: $p<0.01$

3. 学校の性教育での避妊教育について

(表6~表9)

- (1) 学校の性教育での避妊教育の有無は表6に示すとおりで、学校で避妊教育を受けた者は92.7%と多かった。男女の比較では、男女同じ割合であった。
- (2) 学校で避妊教育を受けた229名のうち正しい知識を得られたかについては表7に示すとおりで、「はい」と回答した者が88.0%と多かった。男女比では「はい」と回答した者は女性に多く有意差が認められた($p<0.01$)。
- (3) 学校で避妊教育を受けた者(229名)のうち正しい技術を得られたかについては表8に示すとおりで、「はい」と回答した者が43.9%と知識の半数に留まっていた。男女比では「はい」と回答した者は女性に多く有意差が認められた($p<0.05$)。

4. 学校以外での避妊教育について

学校以外で避妊について知識や技術を得る機会があったかについては表9に示すとおりで、「はい」と回答した者が19.3%と2割以内に留まっていた。

考 察

1. 避妊の実行について

避妊の実行については「いつもする」者が約7割

はいたが、子どもの誕生を希望しない者は全員が避妊を実行するよう働きかける必要があると考えられる。一方、男女の比較では、「いつもする」は有意に女性に多く、「場合による」は有意に男性に多い結果であったことから、避妊をしないでセックス(性交渉)した場合、妊娠をするという認識が男性には乏しいと考えられる。

次に、「いつもする」と回答した者の避妊方法は、「コンドーム」が9割以上と最も多く、やはり若者の避妊方法としてコンドームは手軽であることが好まれていると考えられる。他の避妊方法として1割弱の学生が上げていた「膈外射精法」は避妊効果が無く避妊法といえるものではない。また女性が有意に使っていた「月経からの日数を数える」オギノ式避妊法や「基礎体温を測る」基礎体温法という避妊方法は女性が主体的にできるものではあるがその方法のみでは成功率が低い避妊方法であることから、具体的に正しい避妊情報の提供が急がれる。

そして、「いつもする」と回答した者の避妊の理由は、「子どもを育てられない」が7割強と最も多かったが、これは勉学中で経済力の乏しい学生としては当然のことであろう。すべての学生が望まない妊娠を避けるためには避妊の必要性に対する認識を高める教育が求められる。「当たり前のこと」が4割強あるが、さらに多くの学生がこのように当たり前のこととして避妊行動を習慣化することが望まれ

表6 学校の性教育での避妊教育の有無

項目	全体		男性		女性		検定
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	
はい	229	(92.7)	102	(92.7)	127	(92.7)	
いいえ	18	(7.3)	8	(7.3)	10	(7.3)	
合計	247	(100.0)	110	(100.0)	137	(100.0)	

(注)無回答を除く

表7 正しい知識の取得認識の有無

項目	全体		男性		女性		検定
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	
はい	198	(88.0)	82	(81.2)	116	(93.5)	**
いいえ	27	(12.0)	19	(18.8)	8	(6.5)	
合計	225	(100.0)	101	(100.0)	124	(100.0)	

(注)無回答を除く **: $p<0.01$

表8 正しい技術の取得認識の有無

項目	全体		男性		女性		検定
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	
はい	97	(43.9)	35	(34.7)	62	(51.7)	*
いいえ	124	(56.1)	66	(65.3)	58	(48.3)	
合計	221	(100.0)	101	(100.0)	120	(100.0)	

(注)無回答を除く *: $p<0.05$

表9 学校以外で避妊について知識や技術を得る機会の有無

項目	全体		男性		女性		検定
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	
はい	47	(19.3)	21	(19.3)	26	(19.3)	
いいえ	197	(80.7)	88	(80.7)	109	(80.7)	
合計	244	(100.0)	109	(100.0)	135	(100.0)	

(注)無回答を除く

る。また避妊の理由として4割弱の者が「病気の感染防止」を上げていたが、これは実行する避妊方法として多いコンドームの場合を想定して答えたものと考えられる。

一方、避妊行動におけるイニシアチブとする者については、3選択肢のうち「どちらとも言えない」と答えた者が5割弱と最も多かったが、男女の比較では、「自分」と答える者は男性に有意に多く、「相手」と「どちらとも言えない」は女性に有意に多かった。このことは、9割の者が避妊方法としてコンドームを選んでいたので、ここでの避妊行動も男性が身につけるコンドームによる避妊の実行が想定されており、他の性行動と同様にイニシアチブ²⁾をとるのは男性が多いという結果となったと考えられる。

逆に、避妊をしない理由は、「準備していない」と

「たぶん妊娠しない」がともに3割強と最も多く、「めんどくさい」が2割強、「避妊を言い出せない」が1割強と続いていた。男女の比較では、「めんどくさい」と「準備していない」は男性に有意に多く、「避妊を言い出せない」は女性に有意に多かった。これらのことから、男性にはその必要性を、女性には相手の男性に避妊をするように交渉する力をつける学習の機会を持つ必要が示唆された。また、女性が主体的に実施できる避妊法であるピルの正しい情報を伝えることも大切であると考えられる。

2. 避妊教育について

(1) 学校での避妊教育について

学校で避妊教育を受けた者は9割強と多く、その機会も男女同じ割合であり、避妊教育の実施率の高

さが窺える。学校で避妊教育を受けた者のうち正しい知識を得られたと認識する者が9割弱と多かった, 男女比ではそれは女性に有意に多かった。この理由として, 男性が自分のこととしてしっかり聞いておらず忘れてしまったことが考えられる。

次に, 学校で避妊教育を受けた者のうち正しい技術を得られたと認識している者は4割強であり, 男女比では女性に有意に多かった。これも知識と同様の理由が考えられる。

一方, 本調査と同年にいった井上らの沖縄の高校生(1~3年男女427名)の調査³⁾ではコンドーム使用法やSTDの正しい知識をもつ者は30%以下となっていた。このことから, 具体的な正しい知識の提供と正しい技術の習得の必要性が示唆された。

(2) 学校以外で避妊について

学校以外で避妊について知識や技術を得る機会があった者は2割弱に留まっていた。学校での性教育の現状の改善に働きかけるとともに, 在学しない若者のためにも学校以外の場での性教育を, 特に性感染予防方法や若者の避妊方法についての正しい技術を学校以外の場でも教育していく必要があると考えられる。

3. ピアカウンセリングおよびピアエデュケーションの必要性について

大東らの2002年に高校の1・2年生男女に行った調査⁴⁾では, 悩みの相談相手は8割以上が「同性の友人」であり, 「母親」は約4割であった。また同調査⁴⁾では, 学校での性教育は保健体育の教師によるものが多く, その生徒の満足度は2割弱と少なく, その理由としては実践的でないなどであった。また, 鈴井ら⁵⁾は, 避妊行動や性感染症の予防行動に影

響を与える性の自己決定意思が特に女子に育っていないことを指摘している。相手に依存することなくしっかりした人生設計の上に立ち主体的に性行動を選択できる性の自己決定能力を育てることが大切であると考えられる。青少年の性行動全国調査報告(1999)において, 学校の性教育の機能として以下の3点が望まれると述べている⁶⁾。第一に, 正確で役立つ情報の提示, すなわち誤った情報を鵜呑みにしている生徒にその情報を訂正すること, また知識で終わらず行動に移すときに役立つ情報を与えること。第二に, 青少年の男女共生意識を啓蒙, すなわち男女にかかわらずパートナーを大切に思う心や共感性の樹立といった性行動だけにかかわらないその人の全人的な問題として話し合える場をもっていくべきである。第三に, 単なる情報源の1つという従来の学校の位置づけでなく, 男女共生を根付かせるという位置づけにし, 幼少期からのパーソナリティの形成部分に働きかけるプログラムを組む。そこでは小学生の時点からストレス耐性やコーピング・スキルの向上, コミュニケーション・スキルの向上など取り入れた包括的な授業展開を行う。

以上から, 主体的に性行動を選択できる性の自己決定能力を育てる点においても, 集団としてではなく, 個人個人の要求や意識に応じた対応ができる性教育プログラムを構築していくという点においても, ピアカウンセラーによるピアカウンセリング手法を用いた性教育^{7,8)}の導入が望まれると考えられる。

本研究をまとめるにあたり, アンケート調査にご協力いただきました某大学の学生に感謝いたします。また, アンケート作成などに参画いただきました竹本安希さんに心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 日本性教育協会編: 「若者の性」白書第5回青少年の性行動全国調査報告。小学館, 東京, 1-13, 2001。
- 2) 松本清一監修, 高村寿子編著: 性: セクシュアリティの看護。初版, 建ぼう社, 東京, 54-65, 2001。
- 3) 井上松代, 西平朋子, 賀数いずみ, 玉城清子, 園生陽子, 加藤尚美: 高校生の性行動と関連する要因の研究。思春期学, **22**(4), 495-503, 2004。
- 4) 大東千晃, 西海ひとみ, 水畑喜代子, 喜多淳子: 高校生の性行動, および性教育に対する態度, 関心, 悩み, についての検討(第1報) —高校生における関心事, 悩み, 性教育へのニーズ—。思春期学, **22**(3), 375-391, 2004。
- 5) 鈴井江三子, 藤本美代子, 平岡敦子, 沖田一彦, 辻下守弘: 高校生の性意識に関する一考察。思春期学, **22**(4), 512-519, 2004。
- 6) 日本性教育協会編: 「若者の性」白書第5回青少年の性行動全国調査報告。小学館, 東京, 104-105, 2001。
- 7) 松本清一監修, 高村寿子編著: 性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング。第1版, 小学館, 東京, 86-118, 1999。
- 8) 健やか親子21検討委員会: 健やか親子21検討委員会報告書 —母子保健2010年までの国民運動計画—, 2000。

(平成17年11月20日受理)

**Analysis of the Sexuality Education Needs of Adolescents
— Birth Control Education and Education Field —**

Sawayo TADATSU, Nozomi FUJIWARA and Naoko NAGASE

(Accepted Nov. 20, 2005)

Key words : adolescents, birth control behavior , birth control skill,
sexuality education, education field

Correspondence to : Sawayo TADATSU Dpartment of Nursing, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: tadatsu@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 639-644)